

2014年11月30日(日)開催 2014年度秋季大会のご報告

2014年11月30日(日)14:00~16:00、衣笠キャンパス敬学館地階において、2014年度立命館学校教育研究会秋季大会が開催された。今年度はこれまでより1つ多い5つの分科会に100名を超える参加があり、各分科会とも講師のお話をもとに熱心に討論が行われた。

当日は16:10~17:00まで、今年度実施された教員採用試験に見事合格し、春から教壇に立つ学生たちを励ます「2015年度採用 教員採用試験合格者激励会」が、立命館大学教職教育推進機構と立命館学校教育研究会との共催で開催された。2014年11月30日現在で合格が判明している、延べ257名(現役118名、既卒139名/数は正規採用のみ)のうち44名の参加者を多くの校友教職員が激励した。

引き続き開催された懇親会には、4月より当研究会への入会を予定している採用試験合格者と、会員・現役学生など80名ほどが一同に会し、会員相互の情報交換や新たに教壇に立つ学生への励まし、またこれから教師を目指す学生たちとの交流など、有意義なひと時を持つことができた。

第1分科会「いじめ、体罰、人権～学校教育の今日的課題～」

- 講師：須原 洋次（京都府立北嵯峨高等学校 校長）
- コーディネーター：岡本 真一（神戸市立科学技術高等学校 教頭）

第1分科会は、現職の若手教員、ベテラン教員、本学学部生・院生など20名ほどの参加者で構成されていた。

体罰に関する講演からはじめられた。身体に対する侵害や肉体的な苦痛を与えるような懲戒を体罰という。学校教育法11条で禁止されているが、平成24年度の調査では、高等学校4校に1校の割合で発生している。中学・高校の場合、部活動中の体罰が最も多い。京都府で実施した調査では「体罰容認層」と呼ばれる教師の存在が明らかになってきた。「体罰容認層」の教師は、教科指導や生徒指導の際「場合によっては、体罰に及ぶことがあっても仕方がない」と考え、体罰を受けた生徒は「自分のためにやってくれた」と思っていると捉える傾向があるという。「どこからが体罰か」という認知の困難性等、課題は少なくないが、体罰根絶のためには、生徒からの信頼を獲得し指導力を向上させることが重要であるとまとめられた。

いじめとは特定の児童生徒を心理的または物理的に攻撃する行為であり、心身の苦痛または財産上の喪失を与えるものとしている。いじめ現象としては、冷やかし、からかいが最も多く、次いで無視、軽くたたかれることなどが多い。いじめ克服に向けた課題としては、「いじめ」が「いじり」や人間関係のトラブルと区別しにくく、教師など、被害者以外の認知ができない場合が挙げられた。さらに、保護者からは厳罰を求める傾向が強く、警察は刑法犯として扱うことにより、教育の問題として解決することが難しくなっている。しかしながら、背景にある学校に対する信用、信頼の失墜を克服し、教育者としての覚悟が必要と述べられ

た。

講演のまとめとして、今の教育は徒競争のように、一人ひとりが競い合うようになってしまっていることが問題であるとし、リレー競技のように集団としての評価を重視することで、社会性の涵養が進み、いじめ防止や人権意識もすすむとされた。

その後の質疑・討論では、教師の体罰に対する意識はかなり改善されてきたが、そういった教師に対して挑発する生徒が増えてきているという実態や、学校でのいじめ等に対する対応がチームで行うようになってきているという学校現場からの報告があった。最後に若い参加者に対して「体罰をする教師は自分の指導に自信を持つことができない。授業だけやるのではなく、なんでもできるように先輩から学んでいくことが大切」という発言があった。この学校教育研究会の理念にも重なる貴重な発言であった。

(文責：運営委員 山岡 雅博)

第2分科会「若手教員しゃべり場」

●話題提供：芝野 雄介（神戸市立舞子小学校 教諭）

●コーディネーター：井上 政嗣（雲雀丘学園小学校 教諭）

第2分科会では「若手教員しゃべり場」と題して、神戸市立舞子小学校教諭の芝野雄介先生に話題提供をいただき、参加者どうしの交流なども交えながら、学級経営や授業づくりのあり方などについて研鑽を積みました。小・中・高の若手教員や教員志望の現役学生を中心に、多彩な方々にご参加いただき、大変活発な分科会となりました。

芝野先生のお話は、学級経営、授業づくり、保護者対応といった内容について、ご自身の実践を交えた具体的な事例紹介が中心であり、特に教員志望の現役学生たちにとってみれば、大学での理論的な学びを補完し、近未来のロールモデルを獲得できたという点において、大変有意義なものでした。「授業づくり」についての話の中では、神戸市小学校教育研究会社会科部会において幹事としてご活躍される中、ともすれば知識伝達型の授業に留まりがちな社会科授業のあり方について、学習者である「子どもたちの思考を軸にした授業展開」を追求していることが語られました。このことは他教科、他校種の授業づくりにおいても極めて重要な視点であり、参加者はこれまでの自らの実践を省察する際の視点、明日からの授業づくりに生かすことができる視点を得ることができました。話題提供の後は、「しゃべり場」らしく校種ごとに分かれて交流の時間が設けられ、お互いの経験や悩みを交流しました。

昨今の学校現場を取り巻く状況は厳しいものがありますが、毎年多数の教員を輩出している立命館大学が、今回の芝野先生のように自らの実践を相対化して語ったり、お互いの実践や想いを語り合えたりするような「場」を提供することの意義は大きく、継続的にこのような機会を設けることの大切さを実感することができました。

(文責：運営委員 角田 将士)

第3分科会「学級経営と職場作り～小学校を事例に～」

- 講師：堀 弘（長岡京市立長岡第六小学校 教諭）
- コーディネーター：甲斐 謙介（向日市立第四向陽小学校 指導教諭）

講師の堀先生は、昭和53年度（昭和54年）3月に立命館大学産業社会学部を卒業され京都市内で学生生活を送られ京都市立双ヶ丘中学校から府立嵯峨野高校、立命館大学とずっと吹奏楽部で活動されてこられました。そうした活動の中で、吹奏楽との出会いと喜びをまず語られました。

教師として、昭和55年4月から乙訓の長岡京市立小学校で教員生活をスタートされ、スタートの頃は周りの温かい目に支えられたことや失敗の連続だったこと、その中での音楽との出会いが、それ以後の教師生活の原点となっており、4年生の音楽の合奏時に「なんでできへんねん？」と指摘した場面での、きょとんとした児童の顔を見て自分の指導の愚かさ気付くことができたこと、それ以来、『音楽は音を楽しむもの』だと思えるようになったと貴重な初任者の頃の思い出を語られました。

また35年間の教員生活で得た実践知について具体的な実践内容と事例を示しながらユーモアあふれる語り口で、「学習面で大切にしていること」として教えていただきました。

・『そもそも』という意識や言葉を大切にすることについて「そもそも『体積』って何？」『そもそも』分数は何を表す？」という発問や、算数で習ったことはどんな場面で使えるのか？『比』はどこで使うのか？『比例』は？と課題式を持つことの大切さや「教科書を教えるのではない。教科書で教える。」のだという視点を大切に、教科書に何の疑問も感じないで授業するより、批判的な目を忘れないでほしい。

・考える過程を大切にという視点から算数では、ひとつの答えを導くときに、途中の式を必ず書かせる、) 社会科をでは人々がどんな願いを持って、どう実現させてきたかを辿るのが社会科を学ぶ値打ちであり、親や教師の言うことを「ハイハイ」と聞くだけの人間を育てようとしているのではない。

・「塾は先々に教えてくれる。でも、学校は『それが何でか？』を教えてくれる。」等、とても示唆に富むお話をいただきました。

さらに高学年での担任のご経験を踏まえ、学級づくりで大切にされてきたこととして、

- ・メリハリを大切に
- ・規則は原則として脱明できるもの
- ・高学年女子への対応は丁寧に
- ・いじめ、不登校、育児放棄についての具体的な対応

など、長年にわたるご経験からのお話に参加者も興味深くお聞かせいただきました。

特に近年課題となっている虐待や育児放棄をする保護者の問題について具体的な事例を通しての10年前の保護者の姿と現在の保護者の姿の変容についてお話をいただき、終了後も参加者から質問が出されるなど、参加者も考えを深めることができとても有意義なものとなりました。

最後に「願いを大切に」としておやつや、おこづかいの在り方を通して、子どもたちへの教師の願いを実現するためには、子どもたちが自分たちの手でルールを作り守るという姿を作らないといけないというお言葉をいただき終了いたしました。

(文責：運営委員 富永 直也)

第 4 分科会 「京都市の生き方探求教育（キャリア教育）～中学校現場体験から次の一歩～」

●講師：池上祐司（京都市教育委員会 京都まなびの街生き方探究館 企画推進室副室長）

●コーディネーター：永田 和弘（京都市教育委員会 京都まなびの街生き方探究館 事務局長）

第 4 分科会には約 10 名の参加者がありました。

京都市教育委員会、京都まなびの街生き方探究館企画推進室副室長の池上祐司先生にご講演いただき、参加者はワークショップなどを通し体験的に学びを深めることができました。

講演では、まず初めに生き方探究館の概要をお話いただきました。生き方探究館では、事業者・消費者体験や家計管理等の経済活動を体験することにより生きる力を育成する学習であり、小学 4 年生から系統的・体系的に実施されています。この体験型学習施設は、キャリア教育に特化したものですが、ではそもそもなぜキャリア教育が必要であるかを、学校の授業のような形式で数学の問題を解きながら、お話をされました。そこで、学校における学習が社会に出ることに結びついていないことで、学習意欲に課題が生まれていることについてご指摘されました。将来との関連性が見える学習や体験活動により、子供の世界を広げ、学習意欲を高めることがキャリア教育であり、生き方探究館の役割であることを理解することができました。それを実感するために、実際にファイナンスパーク体験を 3 人グループで行いました。自己紹介から始まり、純所得を計算や生活費の計画を通して、中学生が家計をやりくりすることの難しさや楽しさを学習できるプログラムになっていることがわかりました。まとめとして、教師として卒業生の相談に答えるグループワークを行い、教師が日々の話の中にもキャリア教育を意識した言葉がけを生徒にしていく必要があることを学ぶことができました。

授業から世界的な視点まで、様々な角度からキャリア教育についてお話いただき、参加者は体験活動にも熱心に取り組み、充実した時間を過ごすことができました。

(文責：運営委員 佐藤 希美)

第5分科会 「教師にとっての『表現力の鍛え方』について」

●講師：岡部 秀夫（佛教大学 非常勤講師）

●コーディネーター：山本 宏之（特定非営利活動法人 日印教育支援センター理事長）

教室の机を取り払って、椅子のみの教室で行われた。10秒間でできるだけ多くの人と握手するという構成的エンカウンターで始まった。そして、主体的に参加することが重要であると話された。

教師は話し方、叱り方を学んだ経験がないことが多い、しかし、教師の話し方次第で生徒の心に一生残る言葉がある。自分自身は人前で話すことが苦手であり、恥ずかしかったり辛かったり、悲しかった経験をした。それを、路地裏遊びの一つのチャレンジ（1分間じゃんけんゲーム）やレクの指導をすることで鍛えていったと話された。例えば、指示は一つが伝わりやすいことや、自らが考えて行動することを促す表現をすること、モデルを示しながら話すなどを学んでいった。また、テレビを見て話し方の参考にした。参加者もチャレンジの体験をして楽しみながら話を聞いた。参加者からは、「学級開きに何を話せば良いか」「年に10分程度の話を3回ほど全校集会で話す機会があるが、生徒をぐっとつかむ方法を教えてほしい」など質問が出た。

教師の表現力の話だけではなく、これまでの自身の経験をもとにして話される、日本が大好きな外国人が多いことや、そろばんが素晴らしい可能性をもっているなどが興味深いお話であった。

（文責：運営委員 井上 雅彦）